

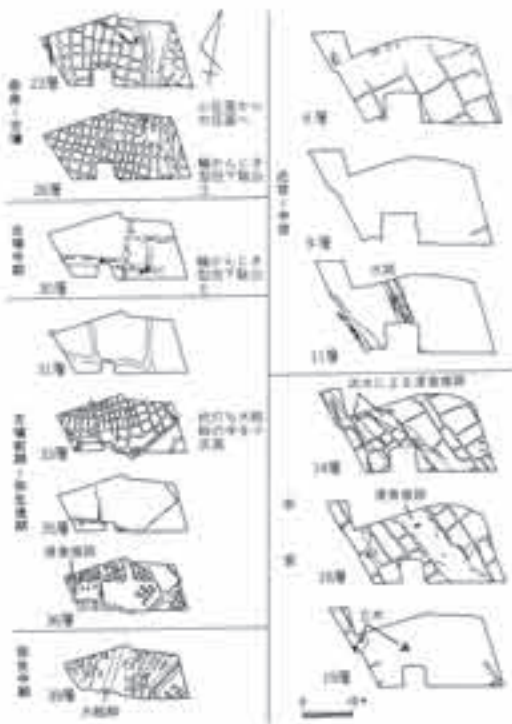
# 4 弥生水田のつくり方としごとの仕方

～静岡平野を中心に～

大陸から北部九州に伝わり、列島各地に広がって日本の社会を大きく変化させた水田稲作は、弥生時代前期にはすでに東北北端の青森にまで伝わっていた。登呂遺跡でおなじみの静岡県であるが、意外と稲作の開始は遅く、弥生時代中期でも後半（紀元前1世紀頃）になってからであった。登呂は後期の水田遺跡なのである。しかし、登呂遺跡があることも一つの要因となり、静岡県とりわけ静岡市の水田遺跡の発掘は全国のなかでも盛んで、蓄積された資料から様々なことがわかる。ここでは、静岡市瀬名遺跡の調査結果から述べてみたいと思う。

## 1 水田のつくり

まずは水田の形であるが、大陸から伝わってきた当初からすでに形が整っていたようで、縦横（図1）水田の変遷（瀬名遺跡）



『静岡県史』通史編1 原始・古代 299頁より



〈写真1〉大畦の補強

きとよみがえってくる。

にはほぼ直交する畦が現在と同じような揃った方形の水田を形作っていた。人が歩ける大畦で囲んだ広い区画の水田内を、地形に応じて小さな手畦で細かく区画していた（〈図1〉の左下の部分）。傾斜のある地形で水を均等に保たせる工夫であろう。大畦は地形の転換点に設けられており、それを境に広い区画の水田に段差がみられる。傾斜の緩い、いわゆる棚田のような構造であったのだろう。また、しっかりとした土手を伴う水路や畦の一部を切った水口も設けられていて、水を水田全体にいきわたらせるしくみが整っていた。大きな水路には、所々に杭列とその間に板材や木の皮を編んだものなどを挟んだ堰が設けられ、小さな水路へと水を誘導していたようだ。これは導水だけでなく、「やな」のような魚を獲るための仕掛けを兼ねていたのかもしれない。水路の土手や大畦は杭列や矢板によって補強された。杭列の間に不要となった建築材や船の部材あるいは田下

駄といった板状のものをリサイクル的に挟み込んでいる部分もあった（写真1）（本テーマの写真はすべて瀬名遺跡のもの）。この念の入った補強は、土手では特に強い水流が当たるとされる箇所（けっかい）に施されており、水路の決壊を防ぐ護岸として、大畦では一段低い水田の側に密に施されており、畦の崩壊を防ぐ土留めとしてなされたのであろう。当時の人々が自然と闘いながら生活していた姿が生き生

## 2 湿地農耕

次に農作業のやり方であるが、鉄はまだ貴重品であったので、農民たちは鉄製の刃を使わずすべて木製の鋤すき〈写真2〉や鍬くわ〈写真3〉によって苦勞して水田を耕した。木製とはいえ大切にされ、〈写真2〉の鋤など修理して使っている。地下水位の高い湿地帯につくられた当時の水田は大変ぬかるんでおり、沈み込まぬように田下駄



〈写真4〉田下駄

履いて農作業をした。瀬名遺跡の水田には実に大量の田下駄〈写真4〉が伴っていた。田下駄は弥生時代特有のものではなく、現代まで各地の湿地帯で使用され続けた。県内でも沼津市から富士市にまたがる浮島沼うきしまぬまなどでナンバとよばれた田下駄が昭和の時代まで使われていた。ところで、稲の収穫具として教科書に登場する石包丁いしほうちようは、静岡県内ではほとんど発見されていない。鉄器の普及とともに使われたとされる鉄鎌てつがまも弥生時代の遺跡からは出てこない。収穫はどうしていたのだろうか。収穫具とは特定できない一般的な石器や木器を使用していたのか、はっきりしないところである。



〈写真2〉鋤



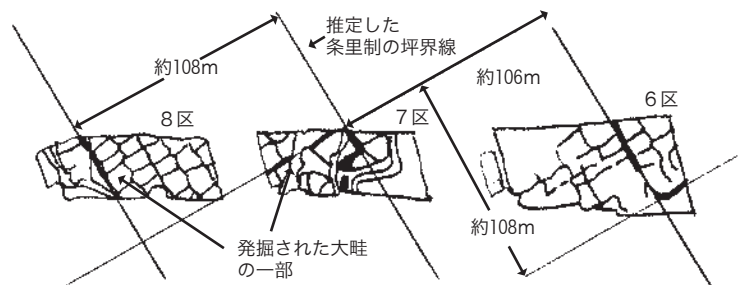
〈写真3〉鍬

## 3 瀬名遺跡が語る水田の変遷

瀬名遺跡では、弥生時代中期から近世までの何層にも重なった水田面を丹念に調査しており、各時代の水田の特徴を比べることができる〈図1〉。この地域で最初に稲作が行われた弥生中期の水田は、大畦とつながらない一時的に作った小さな手畦による大変細かい区画が特徴で、大畦や水路土手の補強はなされていない。稲作が定着した弥生後期から古墳時代にかけての水田は、幾重いくえにも補強された大畦や水路が特徴で、大畦と手畦がつながり始め、細かい区画が恒常的なものとなった。登呂の水田もこの時期のものである。

奈良時代あたりから水田の区画が少し広がり始め、平安時代以降は大きな区画となっている。これは牛馬耕ぎゅうばこうの普及と関係があるのかもしれない。また、平安時代の水田からは、律令国家りつりょうによる条里制土地区画の1町にあたるものと考えられる長さ107mほどの一定間隔で平行に並ぶ特大の畦を伴い始める〈図2〉。このように、時期により水田の形や規模が様々な要因で次第に変化していくことがわかる。一方で、基本的なところは昭和の時代まではほとんど変わらず、最近急速に失われてしまった「里山」さとやまの原風景が受け継がれてきていた。また、これら水田の一面一面がよく残っていたのは、それぞれが近くの河川の氾濫はんらんで砂をかぶりパックされたため、連綿れんめんと続いた人々と自然災害との闘いの歴史にも思いが及ぶ。

〈図2〉瀬名遺跡で発掘された条里型地割（平安期）



矢田勝「静岡平野北部における条里型地割の復原と立地環境の変遷」(『研究紀要Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所) 101頁より作成

〈参考文献〉

『静岡県史』通史編1 原始・古代、別編3 図説静岡県史  
静岡県埋蔵文化財調査研究所『研究紀要Ⅲ』、『瀬名遺跡Ⅰ』遺構編Ⅰ  
佐野五十三『静岡の歴史と風と私』